様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：１６１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４４２０

研究課題名（和文）がん医療に従事する看護師の共感疲労予防に向けた教育ツールの開発

研究課題名（英文）Development of an educational material to prevent compassion fatigue among nurses in cancer care

研究代表者
福森　崇貴（FUKUMORI, Takaki）

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・准教授

研究者番号：５０４５３４０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，がん医療に従事する看護師の共感疲労予防に焦点を当て行われた。まず，患者のがんにまつわる出来事およびそれに対する看護師の認知的反応と共感疲労との関連について量的検討を行った。分析対象者は，国内のがん診療連携拠点病院3施設にて勤務する看護師計536名であった。分析の結果，「患者に生じた出来事」および「看護師の認知的反応」に関するカテゴリーのうち，共感疲労に直接的または間接的に影響を与えるカテゴリーが特定された。次に，これらの知見を元に教育用ツールの作成を行った。これらの成果により，がん医療領域の看護師に対して，根拠に基づいた知見を提供できる体制が整えられたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで，国内外のがん医療領域において，共感疲労という現象は経験的には広く認められていたにも関わらず，その詳細についての実証的な検討は少なく，特に日本に関して言えば，あまり行われてこなかった。そのような意味で，学術的には，日本人を対象として共感疲労の関連要因，具体的には患者に生じる出来事および看護師の認知的反応を実証的に特定できた点，また，社会的には，研究成果を教育ツールとして手に取ることのできるかたちにし，がん医療現場の看護師の共感疲労予防に繋げることが可能となった点が，本研究のもつ大きな意義と考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the prevention of compassion fatigue among nurses involved in the field of oncology. Initially, a quantitative study was conducted to investigate the process by which cancer-related events experienced by patients contribute to the occurrence of compassion fatigue, mediated by the cognitive reactions of nurses. The participants consisted of a total of 536 nurses engaged in specialized cancer hospitals located in three prefectures of Japan. Subsequent to the analysis, specific categories within "patients' cancer-related events" and " nurses' cognitive reactions" were identified as directly or indirectly related to compassion fatigue. Following that, educational materials were developed based on these findings. These outcomes have established a framework for disseminating evidence-based knowledge to nurses in the field of cancer care.

研究分野：臨床心理学

キーワード：共感疲労　がん医療　看護師　二次的トラウマティックストレス　教育用資材

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年，がん医療領域で，共感疲労（compassion fatigue，以下 CF）が注目を集めている。CF とは，患者をケアする中で，相手の苦痛な体験を見聞きし，それによって患者と同様の苦痛な状態に陥ることを指す。特に，患者との接触頻度が高く，心身の距離も近い看護師は，がん患者のトラウマティックな出来事に度々曝露されることとなり（Ablett & Jones, 2007; Quinal et al., 2009），その 30%前後が CF の高リスク群にあたることが指摘されている（Abendroth & Flannery, 2006; Potter et al., 2010）。CF は，看護師の健康状態に直接的な影響を及ぼす（Hegney et al., 2014）のみならず，生産性低下や離職を通じて間接的にがん患者にも影響を及ぼす（Pfifferling & Gilley, 2000）ことから，がん医療に従事する看護師の共感疲労予防は，医療現場にとっての喫緊の課題といえる。

CF の予防を考える上では，その発生メカニズムの理解が重要である。CF の発生に不可欠な要因として，「継続的な患者との接触」が挙げられている（Figley,1995; 2002; Jackson & Warren, 2012）。また，混乱したスキーマの理解が CF 予防には重要との指摘（Huggard, 2003; Pearlman & Saakvitne, 1995）や，看護師の信念，期待，想定の変化が CF に特徴的なサインであるとの指摘（Sabo, 2011）も併せて考えると，患者との接触と CF との関連には認知的変数が介在していることが窺われ，よって，共感疲労の発生を考える上では，患者と継続的に接する中で，看護師にどのような認知的反応が生じるかに着目することが必要となる。しかし，CF の発生における認知的評価の役割への言及はみられているものの，実証的なモデル呈示には至っていない（Coetzee & Laschinger, 2017）のが現状である。

このような背景を受け，福森ら（2016），Fukumori et al.（2018）では，看護師の CF のきっかけとなるがん患者の出来事とはどのようなものか，そして患者の出来事に曝露した看護師にはどのような認知的反応が生じるかについて，インタビュー調査データを用いた質的検討が行われた。その結果，患者に生じる出来事としては，「病状の悪化」，「治療の難航」などが，また，看護師の認知的反応としては，「専門職としての不全感」，「自身の身辺への思案」などの 11 カテゴリーが抽出された（福森ら，2016；Fukumori et al., 2018）。ただし，これらの研究には，カテゴリーの妥当性が質的検討のみに依っていることや，出来事－認知的反応－共感疲労間の関連性を示せていないことなどの課題も認められた。よって，それらの課題を克服するためには，量的データを元にした検討が必要である。そしてさらには，そこから得られた知見をもとに教育ツールを作成し，がん医療領域で働く看護師に提供することで，我が国におけるがん医療従事者に向けての警鐘を鳴らすのみならず，具体的な支援システム構築に繋がるものと考えられる。

２．研究の目的

本研究では，（1）先行研究（福森ら, 2016；Fukumori et al., 2018）で得られたカテゴリーの妥当性を量的に検討すると共に，がんにまつわる患者の出来事および看護師の認知的要因に焦点化した共感疲労の発生プロセスを示し，共感疲労に繋がるリスク要因を特定すること，（2）特定されたリスク要因をもとにした共感疲労予防用教育ツールの開発を行い，実施可能性を検討すること，という 2 点を目的とした。なお，（1）に関しては，Hofmann（2014）の認知行動モデルに基づき，「きっかけ」（患者に生じた出来事）－「状態的認知」（看護師の認知的反応）－「主観的体験／身体症状／行動的反応」（看護師の CF）という順序・枠組みで仮説モデルを構成した。

３．研究の方法

研究 1　患者に生じるがん体験に関する質的分析

調査対象者および手続き：福森ら, 2016；Fukumori et al., 2018 の 2 次解析であり，調査対象者や手続きに関してはそれらの研究と同様である。分析は，内容分析（content analysis）を行った。

研究 2　共感疲労の生起に関わるモデルの検討

調査対象者：関東，関西，四国の 3 県にあるがん診療連携拠点病院にてがん医療に従事する看護師を対象に，質問紙調査を実施した。計 1018 部の質問紙を配付し，545 部を回収した。そのうち，「協力しない」にチェックを入れて返送された 6 部および白紙回答 3 部を除き，最終的に 536 名（男性 28 名，女性 508 名，平均年齢 37.40±10.87 歳）から回答が得られた。なお，調査に先立ち，想定するパスモデルを元にサンプルサイズの計算を行ったところ，RMSEA を.05 に設定した場合，必要例数は 502 例であった。

調査内容：

（1）がん患者に生じた出来事：看護師から見たがん患者の苦痛な出来事を測定するため，研究 1 の内容分析結果をもとに作成された 11 項目に，有識者（臨床経験豊富な看護師）4 名による内容妥当性検討過程で追加された 4 項目を加えた，計 15 項目（5 件法）を用いた。

（2）看護師の認知的反応：がん患者に生じた出来事に対する看護師の認知的反応を測定するため，質的分析結果（福森ら, 2016；Fukumori et al., 2018）をもとに作成された，計 40 項目（5 件

法）を用いた。
（3）共感疲労：ProQOL-JN（福森他，2018）を用いた。この尺度は，Professional Quality of Life Scale version 5（ProQOL-5；Stamm, 2010）の日本語版であり，わが国の看護師を対象に開発されたものである。看護師がストレスフルな出来事を経験する患者を援助することにより生じる影響について測定することを目的としており，「共感疲労」，「共感満足」，「バーンアウト」の下位尺度各 10 項目，計 30 項目（5 件法）から構成される。
（4）基本属性：性別，年齢，最終学歴，臨床経験年数，がん医療経験年数，新型コロナウィルス感染症（COVID-19）患者の看護経験（感染者の看護経験および看取り経験），労働時間（過去 1 ヶ月における労働時間数），主に従事する診療科，について尋ねた。

調査手続き：
各医療機関に研究代表者もしくは研究分担者が連絡の上，病院長または看護部長に対し，調査協力についての説明・依頼を行った。各科の看護師長には，看護部会議の場で看護部長を通して協力を求めた。了承が得られた後，各機関に所属する看護師に調査用紙を留置き法にて実施・回収した。なお，調査実施にあたっては，研究代表者の所属機関および要請のあった調査先医療機関の研究倫理委員会の承認を得た。

データ分析：
（1）がん患者に生じた出来事に関するカテゴリ合成
（2）看護師の認知的反応の項目群の因子分析（探索的因子分析・確証的因子分析）
（3）「出来事→認知的反応→共感疲労（専門職の QOL）」というモデルに関する共分散構造分析
なお，確証的因子分析および共分散構造分析の推定は WLSMV 推定で行い，欠測は各モデルに含まれる変数についてリストワイズ削除によって処理した。

４．研究成果
研究 1
抽出されたコンテント数は 105 であった。そこから 11 のサブカテゴリーが特定され，それらはさらに 4 のカテゴリーに分類された。それらのカテゴリーは，「病状の悪化」，「医師からの悪い知らせ」，「治療の難航」，「家族とのすれ違い」であった。次いで，研究内容や手順を知らない判定者 2 名が各構成要素の出現の有無を個別に判断した。その結果，Kappa 係数は.89 となった。最後に，2 名の判定者が，不一致箇所について協議を行い，最終的な判断を行った。そしてその結果に基づき，各構成要素およびカテゴリーの出現頻度が算出された。参加者の中で特に出現頻度が高かったサブカテゴリーは，「がんの症状が悪化する」（n＝20，67%），「痛みのコントロールがうまくいかない」（n＝11，37%），「がんの診断を受ける」（n＝10，33%）であった。また，各カテゴリーの出現頻度は，「病状の悪化」（n＝20，67%），「医師からの悪い知らせ」（n＝19，63%），「治療の難航」（n＝18，60%），「家族とのすれ違い」（n＝6，20%）であった。
これらの分析によって得られたカテゴリーおよびサブカテゴリーをもとに，研究 2 で使用される尺度項目案が作成され，それらの項目について有識者 4 名による内容妥当性の検討が行われた。

研究 2
（1）対象者の属性
対象者の最終学歴は，専門学校 277 名（51.7%），短期大学 37 名（6.9%），4 年制大学 193 名（36.0%），大学院修士課程 12 名（2.2%），大学院博士課程 3 名（0.6%），その他 7 名（1.3%），未記入 7 名（1.3%）であった。また，主に従事する診療科は，外科 202 名（37.7%），内科 171 名（31.9%），外科・内科混合 97 名（18.1%），緩和ケア 16 名（3.0%），その他 30 名（5.6%），未記入 20 名（3.7%）であった。
対象者の免許取得後の経験年数の平均値は 14.02±10.35 年（中央値 12 年）で，がん医療に従事した総年数の平均値は 10.77±8.83 年（中央値 9 年）であった。また，過去 1 ヶ月間における平均労働時間は 175.79±145.70 時間（中央値 160 時間）であった。
COVID-19 患者に対する看護経験については，「なし」が 420 名（78.4%），「あり」が 114 名（21.3%），未記入が 2 名（0.4%），看取り経験については，「なし」が 435 名（81.2%），「あり」が 97 名（18.1%），未記入が 4 名（0.7%）であった。

（2）がん患者に生じた出来事に関するカテゴリ合成
出来事変数については，因子分析モデルには当てはまらないため，先行研究の質的分析により理論的に規定される項目群の平均値をとり，観測変数として扱った。その際，有識者による内容妥当性検討過程で追加された項目については，専門家間での討議の上で既存カテゴリに割り当て，そこには該当しないと判断された項目は，新規カテゴリとして独立して扱うこととした。その結果，追加項目の 1 項目（項目 8）は「治療の難航」カテゴリに，また残りの 3 項目（項目 6，9，11）は，「自律性の喪失」という新規カテゴリに割り当てられた。最終的なカテゴリは，「病状の悪化」，「医師からの悪い知らせ」，「治療の難航」，「家族とのすれ違い」，「自律性の喪失」の 5 つとなった。

（3）看護師の認知的反応の因子分析

因子数の決定にあたり，MAP（Minimum Average Partial）基準および平行分析により因子数を探索した結果，MAP 基準で 3 因子，平行分析で 7 因子となった。そのため，3〜7 因子を仮定し，カテゴリカル探索的因子分析を行ったところ，7 因子とした場合にもっとも質的分析によるカテゴリとの親和性が高かった。そのため，7 因子解を採用した。次いで，「.50 以下の因子負荷の項目は削除，1 つの因子に 3 項目以上の項目が負荷しない場合は因子負荷.30 まで許容」というルールに従って対象となる項目を除外し，WLSMV 推定による確証的因子分析を行った。その結果，モデルの適合度は CFI=.937, TLI=.924，RMSEA=.077, SRMR=.066 と，おおよそ許容範囲内の値が得られた。最終的な 7 因子は，質的研究によるカテゴリとの整合性を考慮した上で，「専門職としての不全感」,「生きる意味の問い直し」,「医師への不満」,「患者への没入」,「職務からの逃避願望」,「専門職としての使命感」,「患者・家族への思いやり」と命名された。

これら 7 因子の内的一貫性について，各因子における Cronbach の α 係数を算出したところ，.75-.92 となり，十分な値を示した。

（4）ProQOL の確証的因子分析

ProQOL の全項目について確証的因子分析を実施したところ，モデルの適合度は一定の基準に達しなかった。そのため，先行研究をもとに各因子の因子負荷量上位 3 項目を選抜したモデルを組み，再度確証的因子分析を行ったところ，適合度は CFI=.99, RMSEA=.08, SRMR=.05 となり，概ね許容範囲内の値となった。よって，このモデルにもとづき以降の分析を行うこととした。

（5）共感疲労の生起に関わるモデルの検討

患者に生じた出来事およびそれに対する看護師の認知的反応が，共感疲労をどのように促進するかについて，線形モデルによる検討を行った。その際，COVID-19 患者に対する看護経験による，看護師の認知的反応および専門職の QOL への影響を統制するため，看護経験の有無（看護経験もしくは看取り経験のいずれか片方にでも「あり」と回答していれば「有」とする）を共変量としてモデルに組み入れた。

すべての関連変数を投入した後，5%水準で有意なパスのみを残したモデル（N=492）の適合度は，概ね許容範囲内のものであった（CFI=.921，RMSEA=.057，SRMR=.075）。特に共感疲労に関しては，「患者に生じる出来事」のうち，「医師からの悪い知らせ」が直接的な影響を与えることが示された（β=.26, p=.003）。さらに，「病状の悪化」,「医師からの悪い知らせ」,「治療の難航」,「自律性の喪失」という 4 つの出来事は，「生きる意味の問い直し」,「職務からの逃避願望」,「専門職としての使命感」,「患者・家族への思いやり」という看護師の認知的反応を介して，共感疲労に間接的な影響を与えることが示唆された。なお，「患者・家族への思いやり」から「共感疲労」へのパス（β=-.36，p=.001）を除き，すべてのパスは正のパスとなった。一方で，「家族とのすれ違い」という患者の出来事および「専門職としての不全感」,「医師への不満」,「患者への没入」という看護師の認知的反応については，共感疲労への直接的または間接的な関連は確認されなかった。

（6）共感疲労予防に関する教育ツールの開発

共感疲労発生に関わる要因についての上記の研究結果を踏まえ，共感疲労予防に関する教育ツールを小冊子形式（カラー印刷）で作成した。教育ツールの内容は，①共感疲労の概念説明と例示，②研究により特定された共感疲労の関連要因，③自らの看護を振り返る際のポイント，の 3 点であった。

（7）まとめ

本研究は，①先行研究による質的分析の知見を量的データにより確認すること，特には，患者のがんにまつわる出来事およびそれに対する看護師の認知的反応と共感疲労との関連について検討を行うこと，②量的研究による知見をもとに，共感疲労予防に関する教育ツールを作成し，がん医療領域の看護師に対する根拠に基づいた知見の提供を可能にすること，という 2 つの目的から構成された。

本研究を通して，共感疲労に関わるがん患者の出来事およびそれに対する看護師の認知的反応が特定され，それによって，特定の出来事を経験する患者を看護する際，共感疲労の予防という観点から気をつけるべきポイントが明確になったといえる。しかし一方で，COVID-19 の影響により，医療機関に対する質問紙調査の実施が当初の予定通りには進まず，教育ツールの作成までは行えたものの，複数の有識者からのヒアリングによるブラッシュアップまでには至らなかった。よって，そのことは今後に残された課題となる。最後に，本研究のもつ意義としては，学術的には，日本人を対象として共感疲労の関連要因を実証的に特定した点，また，社会的には，研究成果を教育ツールとして手に取ることのできるかたちにし，今後，がん医療現場の看護師の共感疲労予防に繋げることが期待される点が挙げられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Matsuda Yoshinobu、Kosugi Takako、Yamanaka Masako、Fukumori Takaki、Inoue Akira、Horiki Masashi、Matsunuma Ryo、Kataoka Yuki、Kitamura Hideya、Kataoka Kensuke、Matsuoka Hiroto、Tokoro Akihiro、Inoue Yoshikazu	４．巻 60
２．論文標題 Expectations of respiratory physicians from psychologists in palliative care for patients with non-cancer respiratory diseases	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Respiratory Investigation	６．最初と最後の頁 309～317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.resinv.2021.11.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅井真理子	４．巻 50
２．論文標題 がん患者の遺族のための行動活性化療法を用いた抑うつ軽減プログラムの開発	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本医科大学基礎科学紀要	６．最初と最後の頁 21～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sato Ayako、Fujimori Maiko、Shirai Yuki、Umezawa Shino、Mori Masanori、Jinno Sayaka、Umehashi Mihoto、Okamura Masako、Okusaka Takuji、Majima Yoshiyuki、Miyake Satoshi、Uchitomi Yosuke	４．巻 20
２．論文標題 Assessing the need for a question prompt list that encourages end-of-life discussions between patients with advanced cancer and their physicians: A focus group interview study	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Palliative and Supportive Care	６．最初と最後の頁 564～569
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1478951521001796	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大塚侑希，福森崇貴	４．巻 28
２．論文標題 大学生を対象としたCancer Worry Scale日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人間科学研究	６．最初と最後の頁 22～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小川祐子，平山貴敏，鈴木伸一，浅井真理子	4．巻 1
2．論文標題 がんで配偶者を亡くした遺族のグリーフケア：心理状態と対処行動の視点から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	6．最初と最後の頁 29～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kashimura Masami、Ishizu Kenichiro、Fukumori Takaki、Ishiwata Akiko、Tateno Amane、Nomura Toshiaki、Pachana Nancy A.	4．巻 21
2．論文標題 Psychometric properties of the Japanese version of the Geriatric Anxiety Inventory for community‐dwelling older adults	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Psychogeriatrics	6．最初と最後の頁 378-386
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12683	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 福森 崇貴	4．巻 61
2．論文標題 特集 医療現場での怒り-どのように評価しどのように対応するべきか　患者の怒りのマネジメント	5．発行年 2019年
3．雑誌名 精神医学	6．最初と最後の頁 1325～1333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1405205939	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fukumori Takaki、Miyazaki Atsuko、Takaba Chihiro、Taniguchi Saki、Asai Mariko	4．巻 59
2．論文標題 Traumatic Events Among Cancer Patients That Lead to Compassion Fatigue in Nurses: A Qualitative Study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Pain and Symptom Management	6．最初と最後の頁 254～260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jpainsymman.2019.09.026	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hosogoshi Hiroki、Iwasa Kazunori、Fukumori Takaki、Takagishi Yuriko、Takebayashi Yoshitake、Adachi Tomonori、Oe Yuki、Tairako Yukino、Takao Yumiko、Nishie Hiroyuki、Kanie Ayako、Kitahara Masaki、Enomoto Kiyoka、Ishii Hirono、Shinmei Issei、Horikoshi Masaru、Shibata Masahiko	4．巻 14
2．論文標題 Pilot study of a basic individualized cognitive behavioral therapy program for chronic pain in Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 BioPsychoSocial Medicine	6．最初と最後の頁 6～6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s13030-020-00176-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Fukumori Takaki、Goto Toyomi、Sato Hiroshi	4．巻 89
2．論文標題 Development, reliability, and validity of a Japanese version of the Professional Quality of Life Scale for Nurses	5．発行年 2018年
3．雑誌名 The Japanese journal of psychology	6．最初と最後の頁 150～159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.89.17202	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Setou Noriko、Fukumori Takaki、Nakao Kazuhisa、Maeda Masaharu	4．巻 12
2．論文標題 Factors related to the fatigue of relief workers in areas affected by the Great East Japan Earthquake: survey results 2.5 years after the disaster	5．発行年 2018年
3．雑誌名 BioPsychoSocial Medicine	6．最初と最後の頁 1～8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s13030-018-0133-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 浅井 真理子	4．巻 54
2．論文標題 第15回　心理職として関わるサイコオンコロジー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ファルマシア	6．最初と最後の頁 448～449
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14894/faruawpsj.54.5_448	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 浅井 真理子	4．巻 203
2．論文標題 服薬と処方の心理　くすりをめぐるコミュニケーション　心理職の立場から患者の意思決定を支える	5．発行年 2018年
3．雑誌名 こころの科学	6．最初と最後の頁 83～86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takaki Fukumori, Atsuko Miyazaki, Chihiro Takaba, Saki Taniguchi, Mariko Asai	4．巻 27
2．論文標題 Cognitive reactions of nurses exposed to cancer patients' traumatic experiences: A qualitative study to identify triggers of the onset of compassion fatigue	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Psycho-Oncology	6．最初と最後の頁 620～625
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/pon.4555	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takaki Fukumori, Hiromi Kuroda, Masaya Ito, Masami Kashimura	4．巻 64
2．論文標題 Effect of guided, structured, writing program on self-harm ideations and emotion regulation	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of Medical Investigation	6．最初と最後の頁 74～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2152/jmi.64.74	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福森崇貴	4．巻 30
2．論文標題 心理士のストレス（特集 医療従事者・支援者のストレスケア）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 精神科	6．最初と最後の頁 543～547
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅井真理子・白井由紀	４．巻 1
２．論文標題 ケアする人が使えるカウンセリングスキル	５．発行年 2017年
３．雑誌名 エンド・オブ・ライフケア	６．最初と最後の頁 35～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　9件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 福森 崇貴、岡本 恵、広瀬 寛子、山田 真希子
２．発表標題 今あらためて共感を考える
３．学会等名 第34回日本サイコオンコロジー学会総会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shirai Y, Kondo M, Morikawa M
２．発表標題 Qualitative analysis of nurses’ role in decision support for patients with relapsed or refractory leukemia and malignant lymphoma.
３．学会等名 The 17th World Congress of the European Association for Palliative Care online
４．発表年 2021年

１．発表者名 白井由紀，近藤めぐみ，森川みはる
２．発表標題 再発・治療抵抗性の造血器悪性腫瘍患者の意思決定を支えるケア：多職種連携において看護師が担う役割とは
３．学会等名 第34回日本サイコオンコロジー学会総会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 白井由紀，近藤めぐみ，森川みはる
２．発表標題 再発・治療抵抗性の造血器悪性腫瘍患者を支えるケア： 意思決定する患者に看護師が担う役割とは
３．学会等名 第26回日本緩和医療学会学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮園めぐみ，田村恵子，白井由紀，井沢知子，森雅紀，森田達也
２．発表標題 治療中の進行がん患者に対するがん看護専門看護師の支援に関する質的研究：積極的治療中止の事態に備える看護に焦点を当てて
３．学会等名 第26回日本緩和医療学会学術大会2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 山内綾乃，加藤裕規，松村優子，白井由紀，田村恵子
２．発表標題 補完代替療法（CAM）の選択におけるがん患者と家族のゆらぎ
３．学会等名 日本緩和医療学会第3回関西支部学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 里美 絵理子，住谷 昌彦，伊達 久，山口 重樹，松岡 弘道，福森 崇貴
２．発表標題 がんサバイバーの慢性疼痛をどのように理解し，どのようにマネジメントするか?
３．学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 髙場 ちひろ，谷口 早紀，福森 崇貴
２．発表標題 がん罹患に伴う「諦め」の特徴に関する質的研究
３．学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井 由紀
２．発表標題 医療コミュニケーション：テクニックを超えてスキルとして学習する“Communication skills beyond techniques”
３．学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井 由紀
２．発表標題 Year in Review がん医療におけるコミュニケーション
３．学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 中西桃子，大内紗也子，田村恵子，白井由紀
２．発表標題 終末期がん患者のスピリチュアルペインに対する看護師のケアの現状
３．学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 廣田 まい，福森 崇貴，川﨑 直樹
２．発表標題 大学生における本来感と関係的自己の可変性との関連
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 笹良剛史，福森崇貴，加藤真樹子，谷口敏淳，宮﨑厚子
２．発表標題 がん医療チーム内の人間関係をどう「見立て」るか？
３．学会等名 第32回日本サイコオンコロジー学会総会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 井上 大輔，明智 龍男，下山 理史，藤森 麻衣子，白井 由紀，森 雅紀，内富 庸介
２．発表標題 がん治療とコミュニケーションスキル
３．学会等名 第57回日本癌治療学会学術集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 清水 研，高橋 孝郎，藤阪 保仁，白井 由紀，吉田 沙蘭，藤森 麻衣子
２．発表標題 サイコオンコロジー：がん治療の進歩によって患者・医療者間のコミュニケーションは変化したのか
３．学会等名 第17回日本臨床腫瘍学会学術集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fukumori Takaki, Miyazaki Atsuko, Takaba Chihiro, Taniguchi Saki, Asai Mariko
２．発表標題 Traumatic events of cancer patients that lead to nurses’ compassion fatigue
３．学会等名 The 20th World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 福森崇貴・佐藤仁昭・高雄由美子
２．発表標題 認知行動療法によってQOL改善のみられた複合性局所疼痛症候群の一症例
３．学会等名 運動器疼痛学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Takaki Fukumori, Atsuko Miyazaki, Chihiro Takaba, Saki Taniguchi, Mariko Asai
２．発表標題 Nurses thoughts in response to witnessing the traumatic experience of cancer patients: Frequency of cognitive reactions in the development of compassion fatigue
３．学会等名 19th World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 福森崇貴
２．発表標題 がん医療で心理学が貢献できること～がん医療従事者を支えるために～
３．学会等名 中四国心理学会第73回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 谷口 早紀，宮崎 厚子，與儀 耕大，門田 芳，井下 真利，多田 幸雄，福森 崇貴，大森 哲郎
２．発表標題 緩和ケアチーム体制の変化が臨床心理士の介入形態に及ぼす影響～徳島大学病院でのチーム活動の検討から～
３．学会等名 第30回日本サイコオンコロジー学会総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 高場 ちひろ，福森 崇貴
２．発表標題 青年期における諦めが精神的健康に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤島 賢吾，福森 崇貴，福田 スティーブ 利久
２．発表標題 日本語版Chronic Pain Acceptance Questionnaire-8(CPAQ-8J)の開発―慢性痛を抱えた大学生を対象として―
３．学会等名 日本心理学会第81回大会プログラム
４．発表年 2017年

１．発表者名 福森崇貴
２．発表標題 がん医療領域で研究を行う
３．学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計12件

1．著者名 髙橋 都、佐々木　治一郎、久村　和穂、浅井　真理子	4．発行年 2022年
2．出版社 メディカル・サイエンス・インターナショナル	5．総ページ数 420
3．書名 がんサバイバーシップ学	

1．著者名 日本サイコオンコロジー学会，浅井真理子	4．発行年 2022年
2．出版社 金原出版	5．総ページ数 129
3．書名 遺族ケアガイドライン	

1．著者名 日本サイコオンコロジー学会，浅井真理子	4．発行年 2022年
2．出版社 金原出版	5．総ページ数 138
3．書名 コミュニケーションガイドライン	

1．著者名 宮下光令，福森崇貴	4．発行年 2020年
2．出版社 青海社	5．総ページ数 395
3．書名 緩和ケア・がん看護 臨床評価ツール大全	

1．著者名 宮下光令，浅井真理子	4．発行年 2020年
2．出版社 青海社	5．総ページ数 395
3．書名 緩和ケア・がん看護 臨床評価ツール大全	

1．著者名 宮下光令，白井由紀	4．発行年 2020年
2．出版社 青海社	5．総ページ数 395
3．書名 緩和ケア・がん看護 臨床評価ツール大全	

1．著者名 恒藤 暁，田村恵子，白井由紀	4．発行年 2020年
2．出版社 医学書院	5．総ページ数 296
3．書名 系統看護学講座 別巻 緩和ケア 第3版	

1．著者名 堀越勝 監修，細越寛樹，岩佐和典，福森崇貴	4．発行年 2019年
2．出版社 株式会社アノック／トライ	5．総ページ数 95
3．書名 慢性痛の認知行動療法―RCT版	

１．著者名 恒藤 暁，田村恵子 編，白井由紀（第3章担当）	４．発行年 2020年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 320
３．書名 系統看護学講座 別巻 緩和ケア 第3版	

１．著者名 日本緩和医療学会 編，白井由紀（第Ⅴ章担当）	４．発行年 2019年
２．出版社 南江堂	５．総ページ数 468
３．書名 専門家をめざす人のための緩和医療学（改訂第2版）	

１．著者名 浅井真理子（武田 文和 監訳）	４．発行年 2018年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 412
３．書名 トワイクロス先生の緩和ケア	

１．著者名 伊藤嘉規・浅井真理子（症例２-Ⅱ担当）　有賀 悦子（編）	４．発行年 2017年
２．出版社 日本医事新報社	５．総ページ数 244
３．書名 症例を時間で切って深く知る!がん緩和医療	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	浅井　真理子 (ASAI Mariko) (50581790)	日本医科大学・医学部・准教授 (32666)	
研究分担者	白井　由紀 (SHIRAI Yuki) (30587382)	京都大学・医学研究科・准教授 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関